

松山遺跡第1・2次発掘調査報告書

(京都府京丹後市文化財調査報告書第5集)

2011.1

京丹後市教育委員会

松山遺跡第1・2次発掘調査報告書

(京都府京丹後市文化財調査報告書第5集)

2011.1

京丹後市教育委員会

序

京丹後市は「ひと・みず・みどりー歴史と自然が織りなす交流のまちー」のスローガンに示されるように、豊かな自然とともに数多くの文化財が残されたまちであり、その中でも5つの国指定史跡をはじめ6,000ヶ所近くの埋蔵文化財が確認される、京都府でも有数の遺跡密集地として知られている地域でもあります。

平成21年度は、府営ほ場整備事業に伴う松山遺跡の範囲確認のための発掘調査を実施いたしました。今回の発掘調査の成果は本稿により紹介しておりますが、これまで様相の不明であった本遺跡の範囲や内容の一端を知ることができました。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご指導ご協力いただきました関係機関の方々、さらに発掘調査に従事していただきました作業員・補助員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成23年1月

京丹後市教育委員会

教育長 米 田 敦 弘

例 言

1. 本書は、京丹後市教育委員会が平成21年度に実施した松山遺跡の範囲確認のための発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、京丹後市教育委員会が主体となり、国から国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受けて実施した。
3. 現地調査は、次の通り実施した。
第1次調査 平成21年5月28日～5月29日 調査担当者 横島勝則・岡林峰夫・能勢知生
第2次調査 平成21年9月24日～10月16日 調査担当者 岡林峰夫・能勢知生・橋本勝行
なお、本発掘調査報告書の作成は、平成22年度に京丹後市の単費事業として実施した。
4. 本書に使用した方位は、第1図を除き磁北で、レベルは絶対高である。
5. 調査記録写真の撮影は、キャノンEOS-55（カメラ）、キャノンEF50mm 1:2.5（レンズ）、UVフィルターを使用した白黒フィルム・リバーサルフィルムによる撮影のほか、デジタルカメラによる撮影を行った。なお本書掲載の写真図版は、デジタルカメラ撮影によるものを使用している。
6. 発掘調査報告書の執筆・編集は岡林・橋本が行った。
7. 本書に収録する出土遺物、写真・実測図類の調査記録は、京丹後市教育委員会が保管している。
8. 本発掘調査に関しては、多くの方々から指導、助言、協力を得た。記して厚く感謝を申しあげる次第である。
京都府教育庁指導部文化財保護課、京都府丹後教育局、京都府丹後土地改良事務所、丹後地区森林組合、株式会社水口組（敬称略）

目 次

第1章 調査に至る経過	1	（岡林）
第2章 位置と環境	2	（橋本）
第3章 調査の概要		
（1）第1次調査	3	（岡林）
（2）第2次調査	3	（橋本）
第4章 まとめ	7	（岡林・橋本）
写真図版		
報告書抄録		

挿図目次

第1図 調査地位置図（1/5,000）	1	（4）第1次調査G 1－2 重機掘削風景
第2図 周辺遺跡分布図（1/25,000）	2	（5）第1次調査G 1－2 北東側断面
第3図 第1次調査実測図（1/50）	3	図版2 （1）第2次調査G 2－1 調査後全景
第4図 第2次調査実測図（1/50）		（2）第2次調査G 2－2 調査風景
出土遺物実測図（1/4）	5	（3）第2次調査G 2－2 調査後全景
		（4）第2次調査G 2－3 遺構検出状況
		（5）第2次調査G 2－3 調査後全景
		（6）第2次調査G 2－4 調査後全景
		（7）第2次調査G 2－5 調査後全景
		（8）第2次調査G 2－6 調査後全景

写真図版目次

図版1 （1）調査地遠景	
（2）第1次調査G 1－1 調査風景	
（3）第1次調査G 1－1 調査後全景	

第1章 調査に至る経過

松山遺跡は、京丹後市大宮町森本小字松山・織戸・宮の奥に所在する散布地である。大宮第三小学校の南側に位置しており、竹野川左岸段丘上および竹野川氾濫原に立地する。これまで発掘調査は行われていなかったが、縄文時代後期の注口土器^(註1)や弥生土器が表採されており、内容は不明ながら内陸部に位置する縄文～弥生時代の遺跡として知られていた。

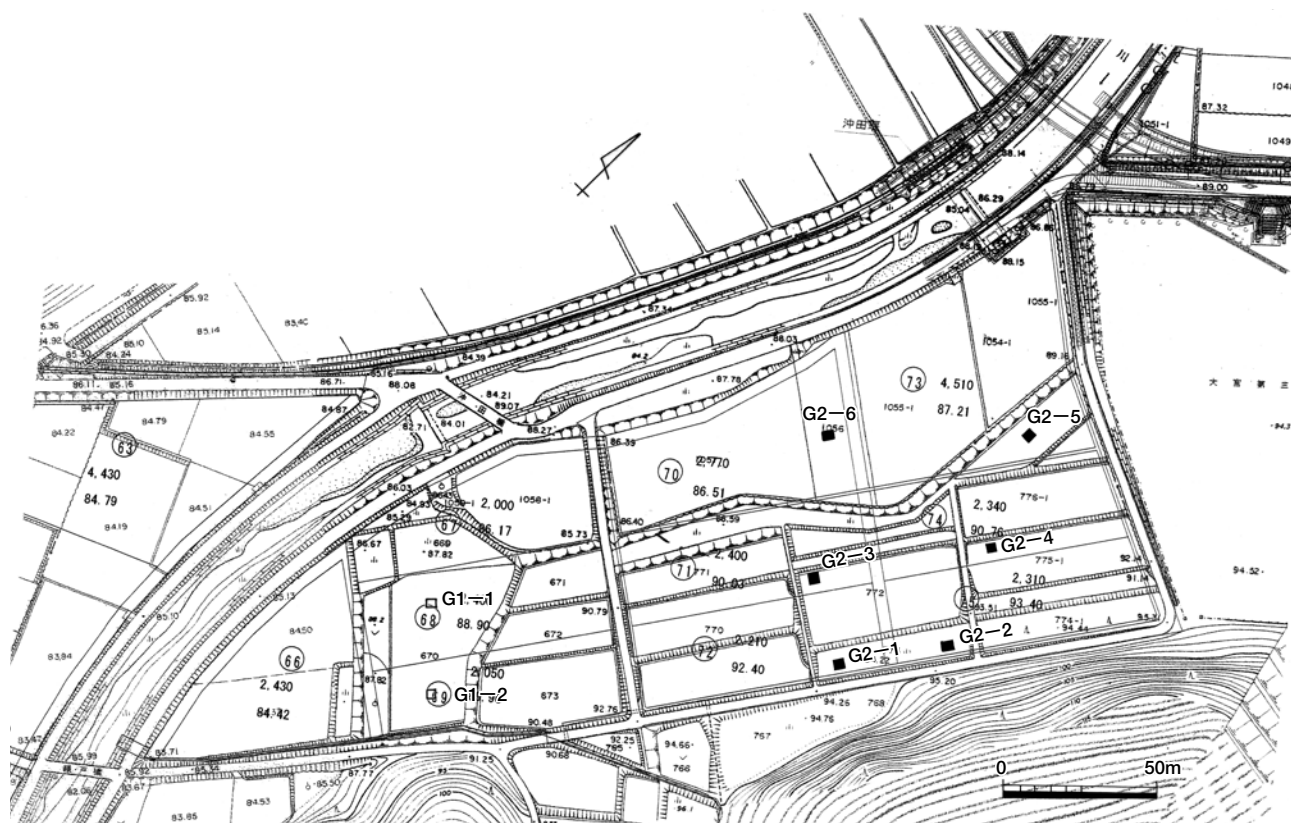
遺跡周辺は、現在、大宮第三小学校が立地する箇所を中心に、昭和14～15年ころに耕地整理が行われたという。大宮第三小学校周辺から五輪塔が出土したことがあったとも伝える。また森本地区の氏神である大屋神社は、遺跡の奥にのびる小字宮の奥の谷筋に勧請されたものが、寛文8（1668）年に現在地へ移転したものと伝える。

今回の調査は、大宮第三小学校南の竹野川左岸一帯が府営経営体育成基盤整備事業の対象地となったため実施したものである。事業採択後、

地元から早急な事業実施の要望を受けていたことも踏まえ、京都府教育委員会や京都府丹後土地改良事務所など関係機関との協議の結果、平成21年度に遺跡の範囲を確認するための試掘調査を京都府教育委員会と京丹後市教育委員会が分担して実施することとなった。

調査は事業対象地のうち遺跡縁辺部と想定される低地部分を京丹後市教育委員会が担当、遺跡中心部分と見られる段丘状部分を京都府教育委員会が担当することとしたが、遺跡北側部分の一部については市教委が調査した箇所がある。

試掘調査は、事業計画および地元要望を考慮し、緊急性が高く耕作に影響を及ぼさない箇所を先行して行い（第1次調査）、田畑の収穫後に再度調査を実施した（第2次調査）。京都府教育委員会の試掘調査は、京丹後市教育委員会の調査終了後に実施された（第3次調査）^(註2)。



第1図 調査地位置図 (S = 1/2,500)

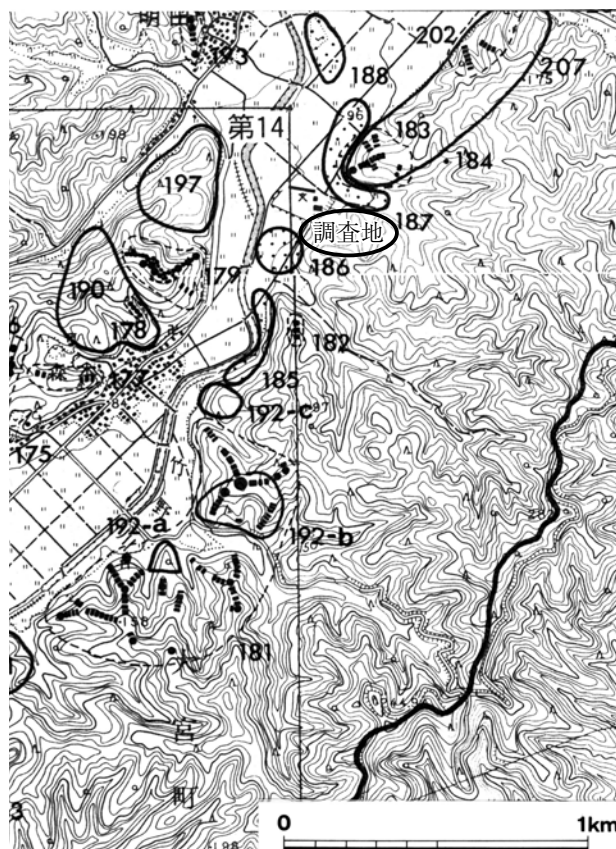
第2章 位置と環境

松山遺跡は、京丹後市大宮町の東部に所在する。

竹野川は大宮町北東部の金剛童子山系に水源を持ち、まず木積山山系に沿って南進し、山系南端で北へ流れを変え北進し日本海に注ぐ。本遺跡は竹野川が南進する上流地域となる森本地区に位置しており、竹野川左岸の段丘上に位置する。竹野川をさらに上流にさかのぼった五十河・新宮・延利・久住・明田地区を含め、古代から中世には、三重郷とされる地域である。

周辺には、丘陵上に多くの古墳群や山城跡が分布するが、発掘調査が行われたものは少なく、様相は不明な面が多い。調査地背後の丘陵上には古墳が見られないが、南方の丘陵上には89基からなる星ノ内古墳群が所在する。また遺跡の対岸丘陵上には、森本大谷古墳群、愛宕神社古墳群、大谷城古墳群が所在する。これに対して横穴式石室を埋葬施設とする古墳は数少なく、わずかに遺跡北側の谷奥に所在する井内谷古墳が知られるにすぎない。山城跡については、森本城跡、星ノ内城跡・星ノ内南城跡・縁多山城跡が点在する。

一方、平地については、過去の府営ほ場整備事業に伴い沖田遺跡^(註3)や稲荷岡遺跡^(註4)の発掘調査が実施されている。稲荷岡遺跡は、弥生時代中期後葉の土器を含む流路跡が、沖田遺跡では、縄文～鎌倉時代の遺物、古墳時代中期後葉の竪穴住居跡、平安～鎌倉時代の掘立柱建物跡や流路跡などが見つかっている。ほかに遺跡南側に位置するマンジョウジ遺跡では、祭祀用のミニチュア土器が表採されている^(註5)。



第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

- | | |
|-----------------------|--------------|
| 177 愛宕神社古墳群 | 178 當城古墳群 |
| 179 丸谷古墳群 | 181 星ノ内古墳群 |
| 182 宮ノ奥南古墳群 | 183 宮ノ奥古墳群 |
| 184 井内谷古墳 | 185 マンジョウジ遺跡 |
| 186 松山遺跡 (調査地) | |
| 187 沖田遺跡 | 188 稲荷岡遺跡 |
| 190 森本城跡 | 192 星ノ内城跡 |
| 197 入谷城跡 | 207 縁多山城跡 |

第3章 調査の概要

(1) 第1次調査

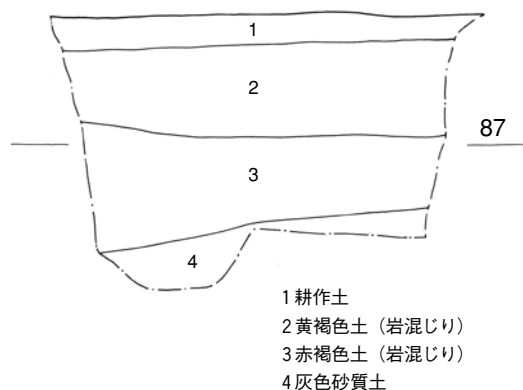
第1次調査地は、遺跡南側の竹野川氾濫原と思われる沖積低地と遺跡中心地と見られる河岸段丘との間に当たる平地であり、調査前の現状は畑または原野であった。事前の聞き取りによると、対象地一帯は全体的に石が多く出るところであるという。

調査時点では詳細な造成計画が示されていないため、包含層の有無、整地等の状況確認を目的に実施した。調査は、3×3mの試掘グリッドを2箇所（G1-1・G1-2）設定し、試掘グリッドの重機掘削を5月28日に行った。その結果、顕著な遺構は見られず、翌29日に重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。調査面積は18m²であった。

【G1-1】

調査対象範囲のうち、竹野川に近い側に設定したグリッドである。かつては耕作が行われていたが、現状は草地であった。層序は①暗茶褐色粘質土（畑耕作土）②黄褐色砂質土（岩多く混じる）③赤褐色砂質土（岩多く混じる）④灰褐色砂質土である。灰褐色砂質土上層付近からの湧水のため、この面以下の調査は実施できなかった。土器等の出土はなく、遺物包含層は確認できなかった。また、各層を人力で精査したが、遺構らしきものも確認できなかった。

(1) G1-1 西壁



【G1-2】

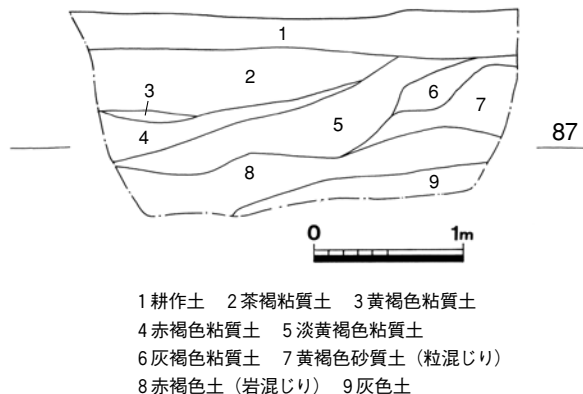
層序は、①暗茶褐色粘質土（畑耕作土）②茶褐色粘質土→赤色粘質土→淡褐色粘質土→灰褐色粘質土→黄褐色土（粒混じり）③赤褐色砂質土（岩多く混じる）④灰褐色砂質土である。②層は、北東から竹野川の位置する西方向へなだらかに15～20°前後の傾斜をもち堆積していた。自然堆積が残ったものと思われる。出土遺物は皆無であった。

(2) 第2次調査

第2次調査地は、遺跡東側の段丘上および、竹野川氾濫原の沖積低地である。段丘上は水田・畑として用いられているが、丘陵裾の標高が高い部分は植林が行われている場所もあった。

調査対象箇所の中には、植林され、下草に笹が繁茂している場所があったため、平成21年9月24日～28日にかけて丹後地区森林組合へ委託し、下草の刈払を行った。6箇所設定した試掘グリッドは、株式会社水口組より借り上げた重機により、9月28日～29日に掘削を行い、翌30日より人力による掘削・精査を開始した。10月7日まで図面作成・写真撮影を併行して行い、9日に機材撤収、15日に重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。最終的な調査面積は54m²であった。

(2) G1-2 西壁



第3図 第1次調査実測図（S=1/50）

なお調査グリッドの掘削深度は、事業計画図による切土面までとしている。

【G2-1】

丘陵裾付近の調査グリッドである。調査地は、かつて水田であったと思われるが、近年は植林が行われていた。地表下約1mまでは、現代の区画整理時の盛土である。その下層には、旧耕作土とみられる灰褐色粘質土（第9層）が分布する。上面は水平分布するが、一部盛り上がり、畦畔跡の可能性はある。下面は、東から西へ向ってレベルが下っており、旧耕作地が造成された際の区画境界であった可能性がある。調査は、旧耕作土（第9層）までを重機掘削した後に、人力で掘削・精査を行った。

旧耕作土（第9層）下層は、遺物を包含する暗灰褐色粘質土（第11層）と灰褐色～暗灰褐色粘質土（第12層）、および遺構面と考えられる硬くしまった暗灰褐色礫混粘質土（第13層）が見られる。遺構面（第11～13層上面）は、旧耕作地の区画造成により削平されている。第9層を除去後に精査したところ、第13層を切り込む溝状遺構を確認した。溝状遺構は、幅0.8～1.1mを測り、第11・12層を埋土とする。西側は、遺物包含層（第14層）が分布する。遺構面（第13層）を確認するため北西側に断割を入れたところ、除々に落ち込み、グリッド北端はさらに深く落ち込むことが判明した。

出土遺物は、遺構検出に伴う精査時を中心に土器117点があった。須恵器杯身（4）・杯蓋・短脚高杯脚部や、内面に暗文を有する土師器碗（2）・丹塗り土師器高杯、内面に段を有する^{（註6）}土師器甕（3）などが見られる。図化したものは飛鳥時代の土器を中心とするが、ほかに古墳時代中期と思われる土師器高杯（1）が見られる。

【G2-2】

G2-1北側の区画に設定した丘陵裾に近い側の調査グリッドである。G2-1と同様に、当初は耕作地として用いられていたが、近年は植林が行われていた。

地表下0.8mまでは、現代の区画整理時の盛土である。その下層には、グリッド西側（川側）を中心に、それ以前の旧耕作土と考えられる灰褐色～黄灰褐色土（第6層）が分布する。G2-1と同様に、旧耕作地が造成された際の区画境界であった可能性が考えられる。グリッド東側（山側）は、風化花崗岩の岩盤および黄灰褐色礫層が分布しており、地山と考えられる。調査は、地表下1mまでを重機により掘削した後に、人力で精査を行った。

グリッド東側（山側）では、地山を掘り込む形で黄灰褐色礫混暗灰褐色土を埋土とする溝状遺構を検出した。溝状遺構は、幅0.3～0.4mを測る。

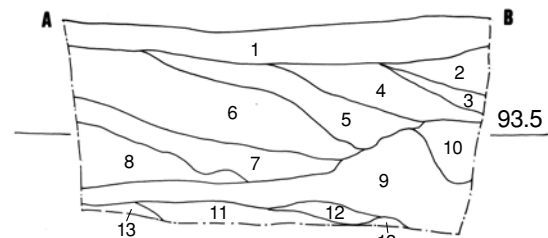
出土遺物は、遺構検出に伴う精査時に6点の土器があった。大半は、溝状遺構埋土上面からのものであり、奈良時代前葉の須恵器杯身（5）を含む。

【G2-3】

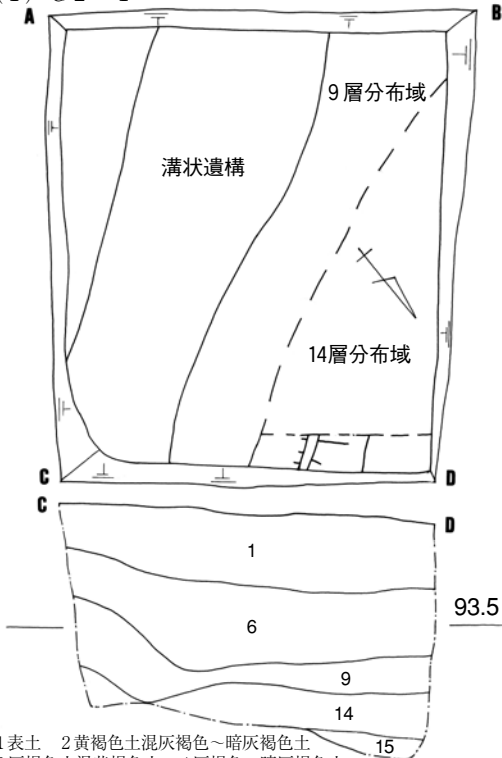
G1の一段下位の田に設定した。地表下1.2mまでは、現在の区画が整理された時の盛土である。その下層には、それ以前の旧耕作土（5～7層）が分布する。第5層の盛り上がりは、旧耕作面に設けられた畦畔と見られる。その下層にしまりのある黄灰褐色礫混土が分布しており、この層が遺構面と考えられる。調査は、地表下1.3mまでを重機により掘削した後、人力で精査を行った。

グリッド東側（山側）では、遺構面が検出され、径0.4mを測るピット状の遺構および長辺0.6m以上×短辺0.6mを測る土壇状の遺構を検出した。埋土は、暗灰褐色シルト質粘砂混灰褐色礫混粘質土であり、炭が混じる。土壇状遺構の上面には、25×15cmを測る石が1個ある。グリッド西側は、若干の遺物を包含する第8層が分布する。グリッド南西側に断割を入れて深さを確認したところ、杭跡およびしまりの良い遺物包含層（第9～11層）を確認した。流路跡または落ち込みの肩部を検出したものと判断した。

出土遺物は130点あるが、いずれも細片である。

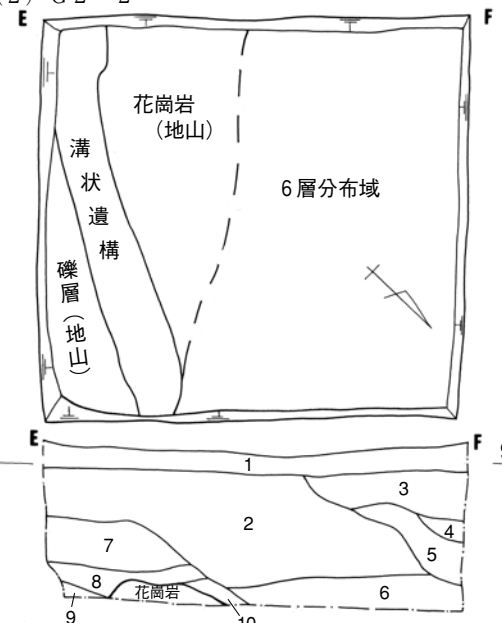


(1) G2-1

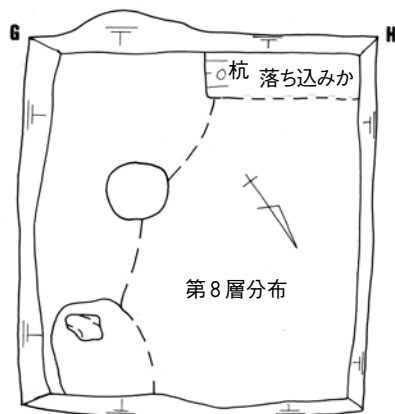


1 表土 2 黄褐色土混灰褐色～暗灰褐色土
3 灰褐色土混黄褐色土 4 灰褐色～暗灰褐色土
5 黄褐色土混灰褐色土 6 灰褐色土 7 灰褐色土混暗灰褐色土
8 灰褐色～明灰褐色土 9 灰褐色粘質土 (旧耕作土) 10 灰褐色土混黄褐色土
11 暗灰褐色粘質土 (炭・遺物含) 12 灰褐色～暗灰褐色粘質土
13 暗灰褐色礫混粘質土 14 灰褐色礫混粘質土 (遺物含)
15 暗褐色礫混褐色粘質土

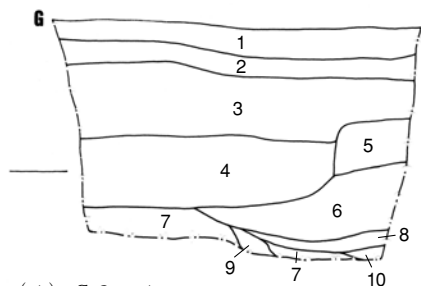
(2) G2-2



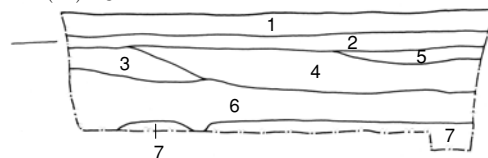
1 表土 2 灰褐色土 3 黄褐色礫混土 4 暗灰褐色砂混土
5 黄褐色礫混灰褐色土 6 灰褐色～黄灰褐色土 7 明灰褐色砂混灰褐色土
8 明灰褐色土混灰褐色粘質土 (遺物含) 9 黄灰褐色礫混暗灰褐色土 (遺物含)
10 灰褐色粘質土混灰褐色～暗灰褐色粘質土



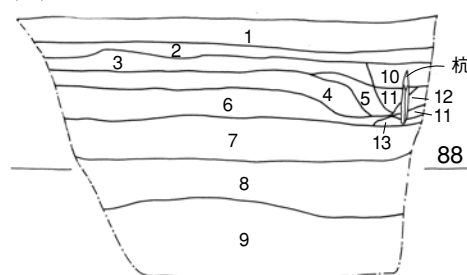
(3) G2-3



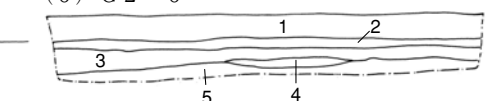
(4) G2-4



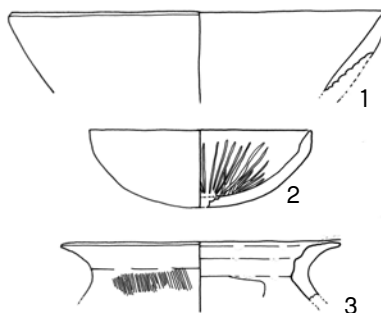
(5) G2-5



(6) G2-6



(7) 出土遺物



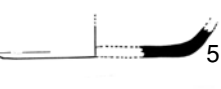
1 耕作土 2 暗褐色
3 暗灰褐色土混暗緑灰色土
4 暗緑灰褐色土混黄灰褐色砂礫
5 灰褐色～暗灰褐色土
6 灰褐色～黄灰褐色シルト質土
7 灰褐色礫混粘質土
8 黄灰褐色礫混粘質土
9 灰褐色～青灰色礫混土
10 黄灰色礫混土 (しりりあり)
11 暗褐色シルト混暗灰褐色礫混土 (遺物含)

1 耕作土
2 暗灰褐色～青灰色土
3 暗灰褐色土
4 黄褐色礫混明灰褐色砂礫
5 灰褐色土
6 黄灰褐色土混暗灰褐色土
7 褐色粘質土

1 耕作土
2 黄褐色礫混灰褐色土
3 灰褐色土
4 黄灰褐色砂礫混灰褐色シルト質砂
5 黄灰褐色砂混明灰褐色～灰褐色シルト質砂
6 黄灰褐色砂混明灰褐色シルト質砂
7 暗褐色シルト (有機質含)
8 明灰褐色～青灰色シルト
9 黄灰褐色砂礫
10 灰褐色粘質土
11 暗灰褐色粘質土
12 灰褐色砂混シルト
13 明青灰褐色シルト

1 耕作土 2 床土
3 灰褐色土
4 灰褐色～暗灰褐色土
5 黄灰褐色砂礫

0 1m



0 10cm

土師器 [高杯 (1)・碗 (2)・甕 (3)]
須恵器杯身 (4・5)
G1 (1～4)、G2 (5)

第4図 第2次調査実測図 (S=1/50)・出土遺物実測図 (S=1/4)

【G2-4】

G2-2の一段下位の田に設定した。地表下0.5mまでを重機掘削した後に、人力で精査を行った。

地表下0.5mまでは、現代の区画整理時の盛土である。その下層には、それ以前の旧耕作土（第6層）が分布する。地表下0.7mに遺物を若干包含する褐色粘質土（第7層）が分布するため、グリッド南半分を掘削し精査したが、遺構はなかった。

出土遺物は、表土・褐色粘質土より12点出土したがいずれも細片である。

【G2-5】

G2-4の一段下側の三角形をした田に設定した。地表下0.7mまでを重機掘削した後、南壁部分を重機で断ち割った。

地表下0.25mまでは、現在の区画に伴う耕作土（第1層）と床土（第2層）である。その下層に、それ以前の旧耕作土と考えられる第3層が分布する。グリッド断面には杭が見られたが、旧耕作土を切り込んでいるため、旧区画の耕作に伴うものと判断した。以下、有機質を含む暗褐色シルト層（第7層）、明灰褐色～青灰褐色シルト層（第8層）、黄灰褐色砂礫層（第9層）があるが、出土遺物は皆無であり、自然堆積と判断した。

【G2-6】

G2-4・2-5よりさらに一段下った田に設定した。第1次調査の際に設定したグリッドG1-1・G1-2と同様に、竹野川の氾濫原と考えられる場所に位置する。

地表下0.2mまで重機で掘削した後に、人力で精査を行った。

層序は、現代の区画整理時の耕作土（第1層）・床土（第2層）、旧耕作土（第3層）、黄灰褐色砂礫（第5層）である。第3層と第4層の間に暗灰褐色土が混じる層（第4層）が見られたため、グリッド南半を掘削し、第5層上面にて精査を行ったが、遺構は見られなかった。

出土遺物は、第3層より土器細片が9点出土したのみであった。

第4章 まとめ

平成21年度に実施した松山遺跡の範囲確認調査は、遺跡の範囲のうち南側の氾濫原（第1次調査）と段丘東側（第2次調査）を中心に調査グリッドを設定して実施した。

第1次調査のG1-1・G1-2は、③層以降は共通しており、赤褐色砂質土上面が87m付近で一定していたが、ともに遺構・遺物は確認できなかった。

第2次調査では、段丘上の山側に近いG2-1・2および一段下ったG2-3において遺構を確認した。G2-1～3は、いずれも現在の区画が整理された段階に盛土されており、1m近い盛土の下層に遺構面が残されていた。遺構面は、現在の区画以前の旧耕作面の下層に位置している。遺物包含層や遺構面は、旧耕作面の造成の際に一部は削平を受けているものの残存していることが判明した。調査が遺構の確認を目的としたため遺構の時期は不明であるが、出土遺物の大半は古墳時代中期後葉および飛鳥時代のものであるため、この時期の所産と推定される。大宮第三小学校を挟んで北側の沖田遺跡では、古墳時代中期後葉～後期前葉の竪穴住居跡が検出されており、当該期の集落が展開していることが推定される。

京都府教育委員会が平成21年度に実施した第3次調査においても、段丘面を中心に遺構・遺物が確認されている。第1～3次の試掘調査の成果を総合すると、松山遺跡は段丘面を中心に遺構が分布することが確認できたといえよう。

今後の開発に際して注意を要したい。

【引用註】

- 1『裏陰遺跡発掘調査概報』大宮町教育委員会 1979年
- 2『京都府埋蔵文化財調査報告書（平成21年度）』京都府教育委員会 2010年
- 3石尾政信「沖田遺跡第2次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第99冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001年）
- 4『左坂古墳群E・F支群・幾坂遺跡B地点・清漬古墳群・五十河遺跡・新宮遺跡・沖田遺跡』大宮町教育委員会 1999年
- 5『古代のまつりとくらし』丹後郷土資料館 1979年
- 6石崎善久「『青野型甕』について」（『京都府埋蔵文化財論集』第3集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年）

写真図版1



(1) 調査地遠景



(2) 第1次調査G 1-1 調査風景



(3) 第1次調査G 1-1 調査後全景

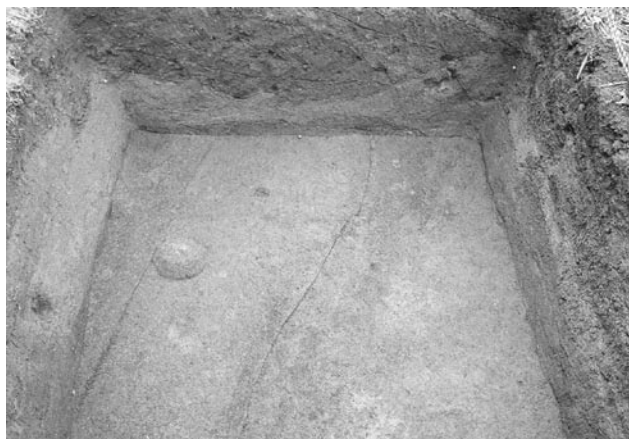


(4) 第1次調査G 1-2 重機掘削風景



(5) 第1次調査G 1-2 北東側断面

写真図版2



(1) 第2次調査G 2-1 調査後全景



(2) 第2次調査G 2-2 調査風景



(3) 第2次調査G 2-2 調査後全景



(4) 第2次調査G 2-3 遺構検出状況



(5) 第2次調査G 2-3 調査後全景



(6) 第2次調査G 2-4 調査後全景



(7) 第2次調査G 2-5 調査後全景



(8) 第2次調査G 2-6 調査後全景

[illegible]

松山遺跡第1・2次発掘調査報告書
(京都府京丹後市文化財調査報告書 第5集)

発行 平成23年1月31日
京丹後市教育委員会
〒629-2501 京都府京丹後市大宮町口大野226
TEL0772-69-0640 FAX0772-68-9061
印刷 有限会社三丹印刷